

田口宏昭教授を送る

佐藤 哲彦

田口宏昭教授は1973（昭和48）年、熊本大学教養部に着任されました。当時はいまだ法文学部時代であり、田口教授の専門である社会学も講座化されておらず、倫理学講座Bコースという名称となっていた頃のことです。教授は着任後は教養部で社会学を講じると共に、文学部の専門課程で演習を持つなどして、文学部教育にたずさわっておられました。その後、1979（昭和54）年の文法分離により文学部が発足して地域科学科が誕生すると、その完成年度である1982（昭和57）年に社会学講座の専任として教養部から移籍されました。以来、社会学講座、そして改組後は社会学分野、社会人間学コースの運営にご尽力されてこられました。

田口教授の専門が医療社会学であることは広く知られています。とはいえ、実は医療社会学自体はそれほど古くからわが国に根付いていたわけではありません。全国的にいえば1973年の日本社会学会での医療研究の部会をきっかけに研究会が誕生し、それを母胎として日本保健医療社会学会が発足したのが1989（平成元）年です。田口教授はそれらの経緯とは別に独自に医療社会学について研鑽を重ねられてこられ、それは教授の著書である『病氣と医療の社会学』（世界思想社）によって世間の知るところとなりました。そして日本保健医療社会学会内部から田口教授の研究の足跡についてお聞きしたいという声が出たこともあり、昨年5月には熊本大学で日本保健医療社会学会が開催され、田口教授が大会長を務められました。

田口教授の医療社会学者としての出発は、そもそもは労働と専門職への関心から始まったといってもいいでしょう。そしてその関心の基礎には、地位にまつわる権力と、それら権力の不平等性に対する問題意識が垣間見られます。それはあるいは学生運動が盛んであった時期に学生時代を過ごされた方々に共通の問題意識なのかもしれませんが、そのような問題意識や関心が具体的な形をとったものが、病院などの組織における専門職としての医師や医療関係職の研究です。またそれは医療という地平においても一方の当事者である、患者の研究、さらには患者の病の体験の研究へとつながってきます。これらはいずれも70年代後半から80年代前半にかけて行われた研究であり、とても早い時期から独自の視点でこんにちの医療社会学の中心的テーマを論じていたことがうかがわれます。

その後、教授の研究は医療の周辺領域へと拡大され、「死」や葬送の問題にまで延びていきます。とくに80年代後半の段階において「死の臨床社会学」という領域に着手され、論文を書かれていたことには驚かされます。当時はいまだ「死」も、また「臨床」も社会学のテーマとしては十分には認知されていない段階であり、それらが社会学的研究として取りあげられ、テーマとして認知されるようになるのは、90年代後半から今世紀に入ってからのことだからです。

以上の経緯でも明らかのように、田口教授の研究は、非常に先見の明のあるものでした。そしてその研究領域の新しさや重要性だけでなく、教授の人柄もあって、ここ十年ほどは医療専門職に従事している方々が大学院生として教授に指導を受けるということが多くなりました。

実は熊本の地は古くから医療研究に伝統のある土地です。1756（宝暦6）年には細川藩によって医学校である再春館と、薬用植物園である蕃滋園が設立されました。ご存じのように、いずれも現在の熊本大学の前身の一部となっております。このような土地柄にあって、田口教授が医療社会学を研究し講じてきたということに、私たちはある種の縁を感じてもいいかもしれません。もちろんそれは単に縁があるというだけに終わらず、田口教授の教え子の方々が近隣の医療看護系の大学や専門学校などで教鞭をとり、さらに後進を育成していくなどの現実的なつながりと経過を伴っております。田口教授はそうにして、熊本に医療社会学の種をまき、育てるという重要な仕事を担ってこられました。

田口教授は退職されたのちも理事・副学長として大学運営にたずさわると同時に、教え子の一人と医療社会的知見にもとづいたNPO法人を立ち上げ、とくに高齢者医療とケアの問題に実際に取り組まれる予定と聞いております。教え子とともに現実の改革に乗り出すというのは、大学教師としての冥利につきるのではないのでしょうか。

古き良き大学を知る方がまたお一人去られることは、私たち残される者にとっては非常に残念なことですが、しかしながら今後も熊本における医療社会学の発展を支えてくださることを期待しております。